

## = 総論 =

### 新しい日本のまちづくりの顔として

千里ニュータウンは、昭和30年代に始まった急速な経済成長による、都市部への人口集中に伴う住宅不足に対応するため、開発面積11.6km<sup>2</sup>、計画人口15万人に及ぶ大阪都心部から10km圏の位置に大阪府が手掛けた日本で最初の大規模ニュータウンであり、日本のニュータウン政策の礎として今日でも各方面からの高い評価と注目を集めています。

計画的に造られたまちは、社会の変化に対する対応が難しく、適切な対応策を施さなければ衰退すると言われており、現在の千里ニュータウンは、まさにそのような様相を呈している感があります。

### 住むものを魅了しつづける住環境

昭和37年(1962年)のまちびらき当時の千里ニュータウンは、それまで一面の竹林地帯であった千里丘陵の面影もない、荒涼とした裸の造成地と化していました。

しかしながら、40年を経た今日にあっては、市民や行政などが一体となって取り組んできたまちづくりが実を結び、潤いのある緑豊かな住宅都市として全国から高い評価を受けています。

このまちの豊かな緑は、千里に住み続けるものにとって、また、周辺地域に住む人々にとっての貴重な共有財産であり、その維持と保全は、千里ニュータウンでのまちづくり全ての部分における基本理念と位置づけられます。

一方、千里ニュータウンの北部など、周辺地域の開発が進み、通過車両の生活道路への流入が増えており、さらに国際文化公園都市(彩都)などが加わり、通過車両や駅利用のための車両の流入量の増加など、様々な住環境の更なる悪化が懸念されるため、これらを未然に防ぐための適切な施策の実施が急がれるところで

### すべてのひとが便利で安心して暮らせるまち

千里ニュータウンの誕生した背景にもあるように、当時、千里ニュータウンに新たに入居した住民の大多数は、日本の高度経済成長の原動力の中心的存在であった20歳代後半から40歳代前半に集中していました。しかしながら、良好な生活環境が整っていった反面、手狭な住宅が多いという状況下においては、高齢者層の定住志向と若者の流出という現象を招き、高齢化と少子化を急速に推し進める形となりました。

いま、千里の抱える大きな課題の一つである少子高齢化への対応を図るためには、千里ニュータウンにおける住宅全体の約85%にも及ぶ集合住宅の再生事業

などをとおして、いびつに変化した年齢構成の適正化や新たな地域コミュニティ形成などに取り組む必要があると考えられます。

高齢者や子育て期の若い世代にとっても暮らしやすい、活力のあるまちづくりのために、高齢者の持つ多様な経験とノウハウを活かしたまちづくりを進め、世代を超えた交流の機会や様々なコミュニティサービスの展開、また地域を育てる人材の育成といった少子高齢化への対応のノウハウを備えた理想のまちの実現が望まれます。また、コミュニティバスや隣接都市及びニュータウン内を結ぶバス路線の充実を図ることが求められます。

## 活力のある地域コミュニティづくり

これまでの日本の生活風景として一般的であった井戸端会議の光景は、近年あまりその姿を目にすることがなくなったように思われ、千里ニュータウンでも、近隣住民との交流を望もうとしない独特のライフスタイルの浸透により、自治会への加入率の低下を招いている地域もあります。

成熟期に至るまでの千里ニュータウンでは、保育園や幼稚園などの公共施設の建設などを求めて地域団体や自治会が活発な活動を展開し、子ども会活動やスポーツ振興などの仲間づくりや組織づくりも活発でした。

今、千里ニュータウンの活性化を考えるための大きな柱は、これら地域コミュニティの活性化にあるのではないのでしょうか。

従来型の地域組織に加え、地域に根ざした特色ある活動を展開するNPO組織の誕生やこれらの組織が主体的に取り組むコミュニティビジネスの誕生が期待されます。また、近隣の大学とも協働しながらコミュニティづくりを進める必要があります。

## 賑わいのある近隣センター

商業機能として各住区に配置された近隣センターは、住民の高齢化や一世帯あたりの構成人数の減少や周辺地域の大型スーパーなどの進出による大きな影響を受けてきました。

また、一業種一店舗という業態が、価格競争の原理が排除された“千里物価”や品揃え不足を生み出し、近隣センターの衰退に拍車をかけました。

しかし、遠方に出かけることの困難な方々にとっては、生鮮食料品など日用品の購入ができる近隣センターを望む声があることも確かです。

近隣センターが、これからも住民の日常生活に貢献できるよう機能再編を行い、様々な機能の相乗効果による人の集まるセンターを目指し、各住区ごとに特色のある近隣センターを演出することが期待されます。

## 医療施設の質的向上

もう一つの各住区に配置された機能で、千里ニュータウンの特徴となっているものに医療センター機能があげられます。

一方では住民の医療機能拡充の需要にこたえる形で、北千里や桃山台といった駅周辺に診療所が集積するビルが出現し始めていますが、ニュータウン建設当初より住民の健康に貢献してきた医療センターも、住民の少子高齢化に伴い機能縮小が顕著に表れています。しかし、気軽に受診できるかかりつけの医者存在は安心できる暮らしにとって重要であり、家庭医の存在を見直す必要があります。

## 豊かな生活と若者を呼び戻す住宅建替え

これら千里ニュータウンにおける様々な課題の解消に大きな影響を及ぼすのが、住宅問題です。

建築から40年の経過で老朽化が目立つうえ、手狭な間取りの集合住宅の建替えは、千里ニュータウンのこれまでの光景を一変させる一大事業となることが容易に想像できるもので、これらの事業に対しては、市民と行政が連携協力した積極的な取り組みが必要と考えます。

敷地に余裕をもって建設されている現行の集合住宅の建替えに際しては、緑の確保や自然環境への配慮及び近隣の低層住宅地との共存環境などにおいて様々な対応が行われなければなりません。

また、この集合住宅の建替えは、若者層の需要に応えることのできる多くの住宅供給が行える絶好の機会になるとともに、バリアフリー化による高齢者や障害者への対応が図られるべきことはいうまでもないことです。

若者層の入居促進や二世帯共生住宅の確保により、千里ニュータウンの当初計画人口の達成や少子化の解消などが期待されます。

しかし、現行の公営住宅関連の法令がその障壁となることも考えられるため、「千里ニュータウン再生法」ともいうべき法令の整備が期待されるところです。

## 豊かに成熟したまちにふさわしい文化の創造と発信

千里ニュータウンの40年のまちの歴史と佇まいは、豊かに成熟したまちの輝きを放ち、歴史と風格に満ちあふれた古いまちとは少し異なった独特の文化を育んできました。

この独特の文化を更に発展させ、新たな千里文化の創造に向けた様々な文化活動を積極的に展開するとともに、千里文化を全国に向けて発信して行かなければなりません。

## 新たな時代の先進都市をめざして！

新たな時代の千里ニュータウンの幕開けは、そこに住むもの自らがまちに愛着をもち、自らが積極的に行動することから始まります。

行政と住民が互いに切磋琢磨し、共通した再生のための構想をもって着実に一歩ずつ歩いて行くことにより、千里ニュータウンが再び日本の先進都市として歩み続けることとなります。

その実現に向けて、吹田市・豊中市が一体となって関連機関と連携し、地域の管理・運営に対して住民が主体的に参画できる組織形成を行うことが必要です。